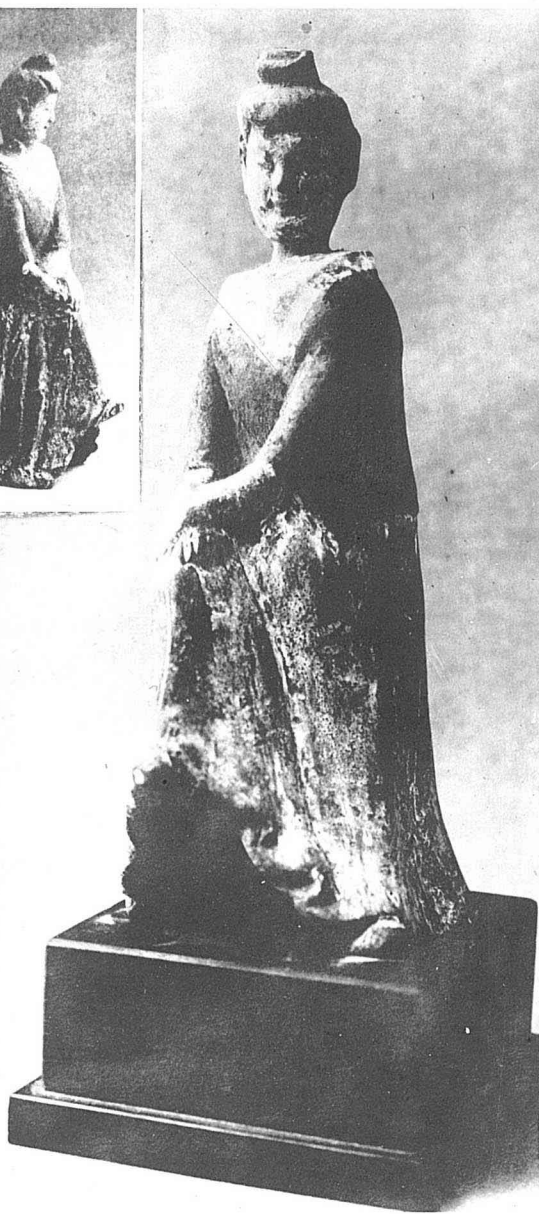


六朝女備

京都帝國大學文學部藏

(濱田耕作君解說參照)



健駄羅彫刻と六朝の泥象 (口繪及插圖解説)

文學博士 濱 田 耕 作

—
 ガンダーラ彫刻に關する私自身の思ひ出は、洵に深いものがある。抑も「ガンダーラ彫刻」なる名稱を始めて覺えたのは、明治三十五年の頃、私が未だ高等學校の學生時代に、文藝の方面から私共の崇拜して居つた高山樗牛博士が、雜誌「太陽」誌上に、其の日本美術史に關する論文を發表した際、グリューンウエーデル氏の書物(Grünwedel, Buddhistische Kunst in Indien)から引用した挿圖と共に、其の説明を試み、日本の彫刻との關係を論ぜ

られたのを讀んだ時である。是が私の興味を深く惹いた結果は、スタイン氏ヘデン氏の中央亞細亞探檢の報告——之を聞いたのは坪井九馬三博士の講義に由つてである——と共に、遂に私をして文學の卒業論文に「希臘美術の東漸を論ず」と云ふ題目を撰ばしめ、其の一部分は其の後『國華』誌上に掲載したのであるが、其れは今日より願れば、實に幼稚な研究として、赤面する外はないものであつた。

斯の如く私はガンダーラ美術を口にしたのであ

るが、其の實際の遺物に至つては、固より之を見る機會があつた譯でなく、たゞグリユンウエーデル氏の著書の挿畫位によつて、之を窺ふに過ぎなかつたのである。然るに僅ながらガンダーラ美術の片影を我々に見せられたのは、伊東忠太博士が支那印度西洋の旅行から歸られて、明治三十九年二月東京の史學會の講演に於いて「健駄羅旅行談」なるものを試みられた際（史學雜誌、第十七編、第五號、第六號）數個の建築的部分の斷片を供覽された時であつた。斯くて我々は始めてガンダーラの青鼠色の綠泥片岩に接して私の心は躍らざるを得なかつた。（特に此の講演を願つたのは、當時史學會の委員の席末を汚して居つた私であつた）

其後フーシェー氏の大著（*Toucher, L'art gréco-bouddhique du Gandhara*）が出でて、ガンダーラ美術は益々日本にも紹介せらるることゝなつたが、故岡倉覺三氏が印度美術に關する講演を同じ史學

會に於いて試みられた時には、其の東亞美術に於ける影響を殆んど否定せられる態度であつて、私をして少なからず失望せしめた。併し一方に於いて大谷光瑞氏が印度から齎らされたガンダーラ彫刻數箇は、我々に始めて佛像の丸彫浮彫を見る機會を與へられたのであつて、是は明治四十年頃かど記憶する。（西域考古圖譜、下卷）私は明治四十年九月京都帝國大學に來任した始め、此の大谷伯所藏のガンダーラ彫刻を見ることを得、又其の石膏複製が、京都高等工藝學校に藏されてゐるのを知り、更に之を複製して、我が大學にも備へることにした。

二

然るに私は大正二年歐洲へ留學することになり西比利亞鐵道に由つてモスクワから伯林に赴き、二三日滞在したが、其の際武藤長藏君の東道を待て、伯林の各博物館を一巡して、人種博物館（*Museum für Völkerkunde*）

Iskande Museum)を訪れた時、同君にグリユンウ
エーデル氏が其の館に居るから面會しないかと云
はれて、私は未だ故國を離れて十餘日、外國語を
話す恐しさをも打ち忘れて病後のグ氏に面會し、
英語を以て僅ながら用を辨じ、其の自慢のガンダ
ー彫刻の蒐集を自ら案内して見せて貰ふ機會を
得たのは、私の最も光榮とした所であつた。

其後私は英國に於いて大英博物館及び、サウス
ケンシントン博物館等所藏の同彫刻を見ることを
得たが、固より伯林のグ氏の蒐集に及ぶ可くもな
かつた。大正三年佛國を過ぎて伊太利へ行く道す
がら、巴里に於いて故シヤヅアンヌ教授の午餐に
招かれ、其のフォンタネ・アウーローズの邸に於い
て、フーシエー氏に紹介され、私は斯くしてグ氏
と共に世界に於けるガンダーラ美術の二大權威に
接することを得たのであつた。

日本に於いては前に記した大谷伯爵の蒐集品以

外に、或は他に二三の箇人的蒐集があるかも知ら

ないが、同伯の藏品は其の後同氏の日本を去られ
ると共に日本を離れてしまひ、我々は親しくガン
ダーラ彫を刻見る場處を失ふに至つたことを悲し
む外はなかつた。又た東都帝國大學には若干の原
物と多數の石膏型が、高楠博士の蒐集により所藏
せられて居つたが、是等は不幸にして震火の爲に
喪はれてしまつた。然るに大正十三年秋山中商會
が大阪に於いて美術品の展覽會を開催した際、そ
こには佛國から購入されたガンダーラ彫刻が數點
並べられたのであるが、是れ實に日本に於いて此
の彫刻が市場に出でた最初であつたと私は信ず
る。私は此の展覽會に出品せられた彫刻中、禮拜人
物の浮彫面と佛頭一箇とを京都帝國大學の爲めに
購入し度いと熱望したのであつたが、右の浮彫は
終に山中定次郎氏の好意によつて山中商會から寄
贈せられ、佛頭は谷川茂次郎氏の寄附金によつて

之を購入することを得たのは、私が大學の陳列館に於ける蒐集^三上最も記念す可く、最も嬉しい出來事の一であつた。(此の事に關して、私はなほ山中松次郎、岩井武俊兩氏が種々盡力せられたことを銘記して置く)

此の展覽會に於けるガンダーラ彫刻の好景氣は遂に山中定次郎氏をして、本年更にガンダーラ彫刻の大なる「コレクシヨン」を舊印度總督府の英國官吏の遺藏品より譲り受け、之を日本に持ち來らしめたが、丁度此の時フーシェー氏が日本來遊中であつたので、本年九月私は同氏と共に大阪へ赴き、親しく此の權威の口から、實物に就いて説明を聞くことを得た。次いで十一月山中商會の展覽會に出品せられた此のガンダーラ彫刻三十餘點はシヤム、カムボヂヤ等の彫刻と共に世間の注意を惹き、殆ど其の三分の二は日本の地に止まることとなつたが、此の際我が大學に再び同彫刻中の塔

婆浮彫一箇の寄贈を受けることとなり、遂に京都帝國大學は二三年の間に三箇のガンダーラ彫刻を所藏するに至つたのである。

以上は私個人のガンダーラ彫刻との因縁話に過ぎないが、一面に於いて多少日本に於ける此の美術に關する鑑賞の歴史を語るものがあると思つて躊躇しながらも書き記した次第である。

三

本年山中氏から寄贈せられた彫刻は、小さな供養塔(全高三尺位)の一部分であつて、綠泥片岩を環狀に列り抜き、其の外周に形像を刻したものである。直徑一尺六寸、高三寸五分。石の上面一ヶ處に淺い方形の臍孔が穿たれてあつて、上部の石と連結せしめるに便にしてゐるが、是は塔婆の稍々上部覆鉢に近い處(恐らくは上から二段目)に來る輪狀帶であつて、其の下方には同じ輪狀帶一二を重ねて、最下に方形の基壇があるのが、此の種

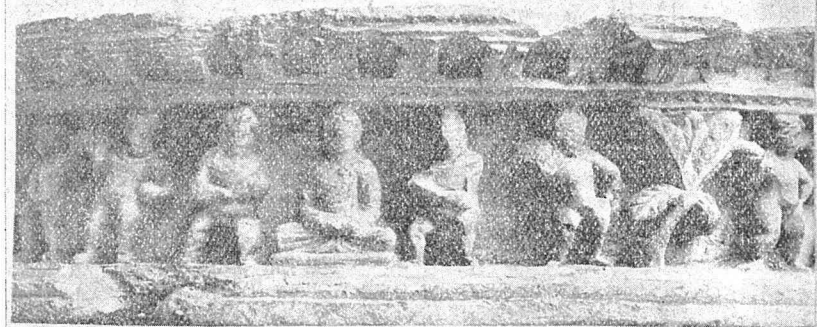
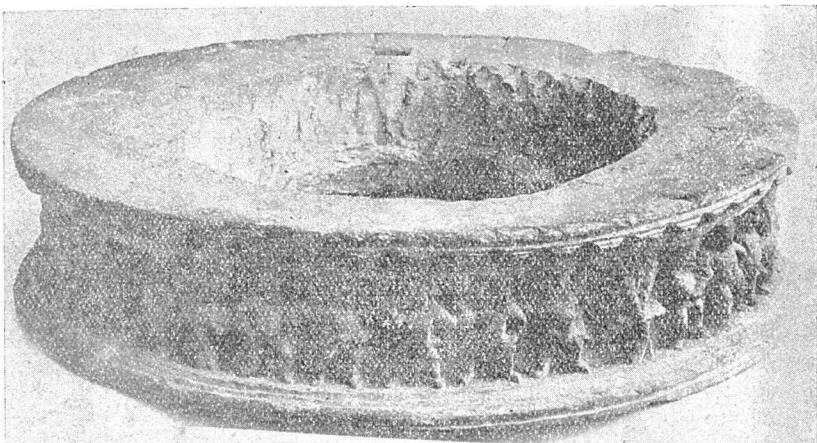
京都帝國大學藏カンダラ彫刻

(上) 供養小塔浮彫

(中) 同上 一部

(下左) 佛頭

(下右) 佛傳浮彫



小塔婆の普通の形式である。カルカッタ博物館にあるロリヤン・タンガイ (Lorayan-Tangai) 發見の塔婆は、正に我々の石から復原し得られる塔婆の好標本であらう。(Grünwedel-Burges, Buddhist Art in India. London, 1901. Fig. 106; Foucher, L'art gréco-bouddhique du Gandhara. Paris 1905. Figs. 70 & 71) 發見地は不明であるが、此の塔婆との類似から考へて、或は矢張ロリヤン・タンガイ邊のものであらうと想像せられる。

石の外周を繞つて上部には、建築の軒蛇腹 (ornice) が現はされ、其の間に持送り (console) が並列せられてゐるが、是はガンダーラ建築の表現に於いて、コリンス式柱と共に最も屢々現はれて來る種類のものである。其の下方には三十の裸體の小兒像、即ち西歐の美術に於いて、所謂「ブッチ」(putti) と稱せられる童兒が並列して、稍々高い浮彫に刻出せられ、各々多少姿勢の變化を示してゐ

るが、特に活動的なものはなく、又た佛像に隣れる小兒の中には、禮拜の態度を現はしたものがあ

り、兩兒の手を取り合つてゐるものもないではないが、互の間に深い精神的の連絡も無く、單に裝飾的の意味に現はされてゐるものと云ふ外はない。

而して童兒三四人目位に菩提樹と思はれる樹を挟み、又た特に二箇處には低い臺座の上に跏趺する二體の佛體が現はされてゐる。此の二佛は稍々接近して圓周上に位してゐる處から見ると、丁度塔婆の正面に來る處に置かれたものかと想像せられる。(東西古陶金石集、第一輯、第二十六圖、源豐宗君解説參照) 左方の佛は禪定、右方のは施無畏の相を示してゐるが、是は單に佛像を現はすと云ふ丈のの意味で、此の相には特別の意義を寓したものでない。

元來小兒の像、即ち所謂「ブッチ」を、斯る浮彫フリトス帶の裝飾に適用することは、希臘羅馬の古典彫刻

に屢々見る所の意匠であつて、時には兒童が花細^{カシラン}を擔いでゐる處があり、又た兒童の代りにアトランテ (Atlantes) が、樹木と交互に現はされてゐること、なほ前記カルカッタの小塔婆に於けるが如きものを見ることが出来る。殊に此の後者は凡てに於いて我々の石と頗る似通つてゐるものと云ふ可きである。其他バックス (Bachus) 屬の神々などの類も、之と同じ意義に於いて裝飾に用ゐられてゐる例は、ガンダーラ彫刻に於いて往々認められる處である。(Foucher, 前出書, Figs. 126—133) 即ち此の浮彫帶の裝飾に、小兒の群像を用ゐたのは、全く古典美術の傳統であつて、而かも其の中にたゞ二軀の佛像を點出した處が、即ち印度の國土に發達した「希臘佛教美術」なるものゝ性質を、單的に表明してゐるものであり、而かも其の希臘思想と印度美術との器械的混合の状態迄も最も善く説明してゐる。

此の童兒浮彫帶は、石面滅磨破損した處が少なくなく、童兒の顔面や身體の細部の鮮明を缺く處があるけれども、斯の如き彫刻の材料として不完全な石材に無造作に彫出して、而かも一々巧妙な姿勢を現はした處は、小さい佛像の衣紋と態度とが簡單ながら如何にも善く整つてゐる處と共に、非凡な技術を示してゐると云はなければならぬ。而して其の希臘趣味の多い處から見て、ガンダーラ彫刻の初期、即ち紀元一世紀頃^{一世紀頃}に於いて、恐らくは希臘從來の彫工の手に成つたものであらうと信せられる。

四

前年谷川氏の寄贈せられた佛頭は、稍々黒味を帯びた矢張り綠泥片岩で作り、頭以下を缺失した高さ七寸の圓彫像の頭部である。鼻端は少しく破損してゐるが、其の顔は端正で、希臘風の鼻筋、引き締つた口元、固よりガンダーラ彫刻全體の通

性として幽玄な佛陀の精神を表現してゐる點に於いては遺憾の點は多いが、古典的形像に屬する最も優柔なる作品と稱することが出来る。其の頭髮が後世のガンダーラ佛像の如く、未だ螺髮的な形式に陥つてゐない所から見ても、之も矢張り前者と同じくガンダーラ初期即ち西紀一世紀に近い頃のものだと鑑す可きであろう。發見地不明。(支那古美術大觀、第九十二圖)

次に山中氏の寄贈に係る浮彫斷片は、左方上部に挺出した部分のある石材の右方に波狀の頭髮と口髭とを有する人物が、兩手を前にして圓い花球の如きものを手にした半裸體の像の上半身を示したものであるが、其の頭には圓い後光が附加せられてゐる。高六寸五分石質は淡綠の綠泥片岩である。(支那古美術大觀、第九十四圖)是を建築の如何なる部分に使用せられたものか不明であるのみならず、世俗的帝王の如き人物にして、而かも背

光を有する點は、フーシユー氏も未だ曾て見たことは無いと云はれた處である、或は彫刻の練習的試材 (trial piece) かとも思はれるが、本年の山中氏の展覽會に於いて全く之と同形の石材に、之と頗る相似た圖を彫刻したのを見ることが出来た(東西金石古陶金石集、第一輯、第廿五圖)是は前と同様の人物が右手を舉げて、花球を將に投せんとする動作を示したものであり、其の頭髮、口髭面貌から背光なども我々の石と全く其の軌を一にしてゐるのであつて、前者と同じ人物の別の刹那の光景を表現したものと見る外はない。

之に關して源豐宗君は、是は恐らく燃燈佛供養圖の如きもの、斷片であつて、婆羅門無垢光が佛に向つて散華供養する様を示したものであらうかと想像せられ、若し然りとせば、特に此の彫刻の作者は此の無垢光が後に釋迦となる可き運命を擔ふものとして、釋迦佛と同じ背光などを附加した

ものご解しても宜いと云つてゐられる。

私は今の場合これ以外に適當なる解釋を見出すことが出来ないから、姑く之に従つて置く外は無い。たゞ此の一對の彫刻中大學所藏の方は、他の一片に比して保存が善く、人物の顔面も磨滅してゐない。是等も同じくガンダーラ彫刻の初期に屬する作品と見る可きであらう。

五

印度のガンダーラ彫刻から、我々の話は支那の泥象に飛ぶ。堅い石の美術から脆い土の小像に移るのであるが、此の支那の泥象は希臘のタナグラ人形と同じく古い墓の中から出で、急に世界中の博物館と蒐集家の飾り棚に洪水の如く溢れた人形であつて、其の評判鑑賞の盛んなると共に、偽物の製作の盛んになつたことまで東西其の軌を一にしてゐる。是等のものは其の時代々々の大なる彫塑美術の世界を可憐なる小世界ミクロコスモスに縮

小したものであつて、風俗史の上に特に有益なる資料を提供するものであることは今更云ふ迄もない。抑も支那の泥象が世間に出でたのは明治四十年の頃であつて、全く河南地方に鐵道が敷設せられ所在の墳墓が發掘せられて此の種明器の屬が世に現はれ、それを西洋人が集め出した以來のことである。(羅振玉、備廬日札。濱田、支那古明器泥象圖説)

併し先づ最初に出現したのは洛陽地方を中心とする唐代の泥象であつて、數年前に至るまでに、支那の泥象とし云へば、殆ど皆な此の時代の者に限られてゐたと云つても宜しい。私が明治四十二年小川琢治博士と一緒に河南洛陽へ行つて、大學の爲に買求めた標本の如きは、即ち其の一例である。然るに其の後次第に西安地方の墳墓から漢代の極く古拙な泥象が發見せられて來たが、所謂六朝時代のものに至つては、最も新しく世間へ顔を

出し、私自身が之を手にし入れたのは漸く大正十年頃の事であつた。(拙稿「六朝の泥象に就いて」考古學雜誌、第十一卷第九號)其後追々と此の六朝俑が日本に渡ることとなり、大學の藏品としても今や已に十體以上に及んでゐる。而して此等の像と北魏の佛像、從つて我が推古時代の佛像との關係の如きも、一の面白い考察の題目として取扱はれる様になり(國華第四百六號、拙稿)斯くて今日では唐代の泥象の如きは、餘程特殊の形をしてゐるもので無くては、誰人も振り向かないと云ふ有様となつてしまつたのは、實に僅か十餘年の間に於ける趣味の變遷である。

私は最近前に述べたガンダラ彫刻と共に、山中商會から京都帝國大學に寄贈せられた一箇の六朝の泥象に就いて次に記して見やうと思ふ。

六

此の土偶は高さ五寸一分の小さい女俑である。

(本誌口繪參看)地質は漢代六朝の泥象に普通な黝黑色の土であつて、其の上に胡粉をかけ、なほ彩色を施したものである。此の像の面白いのは、其の右足を少し揚げて、兩手をば束ねて其の上に置いた姿勢である。元來支那の土偶、殊に六朝の土偶にはたゞ棒の如く直立したものが多く、時に上肢に多少の變化を見せたものはあつても、下肢に斯の如きエケットな動作を現はしたものに絶無に近い。但し此の像の下肢の状態を詳しく考察すると實際に於いては頗る不可解な點が多いのであつて、此の右足は果して如何なる位置に置かれたものであろうか。左の膝の上に組まれたもの、若しくは何か臺の上に足蹠を載せたものとしては、左の足首が左の方に寄り過ぎて居り、實際斯の如き姿勢をしては、顛倒する外は無い。而かも之を背面から見ても、裙は下に重ねて何等腰掛様のものが見えて居ないし、甚だ不自然ではあるが、裳

の内に腰掛があるとして見ると、今度は褶の衣紋の皺襞が殆ど垂直に現はされてゐるのが、解し難いのである。

併し此の様な理屈攻めは、此の小さい女俑に對して餘りに冷刻な批評であらう。私自身も最初一瞥した時には、其處に何等不合理な點を發見せず、たゞ氣の利いた姿勢をしてゐる像とのみ感じた如く此の像の製作者も、恐らくは其の最初の勇敢なる試みとして、右足を揚げた面白い姿勢を作り出し、而かも其の左足や背面には深い注意を拂はず、其邊を宜い加減に作つてしまつたのに違ひない。ほんにそれで宜いのである。理屈は別にして斯の如き面白い變化ある姿勢の像を創造し、而かも看るものに一見面白く心地よい感を直截に與へたならば、其れで澤山である。之を理屈に叶つた像にすることは、後の技術家に殘された問題である。

其の領首の廣い左前への赤い衣の上には、古拙

の笑を帯びた小さな頭首が、今様の結髪をしながら心持ち下を向いて眺め入つてゐる處は、我々をして端なく廣隆寺にある推古時代の木造の彌勒菩薩半跏の像を思ひ起さしめるではないか。其處に六朝の美術の縮圖があるのである。其の衣紋の皺襞の端が推古式の重なり合つた趣を傳へてゐるが如き點は、其の次の瞬間に氣が付いて宜い。

此の女俑の外に江藤氏の手から購入した紗帽の男像一體と大鼓を前にした樂人の男女の像三體とがなほ大學にある。何れも六朝の泥象として頗る面白いものではあるが、此等に關しては又た別の機會に紹介することにしよう。